

## 質疑応答

質問は、東京都千代田区大手町 1-3-4、気象庁内  
日本気象学会天気編集委員会宛、にどうぞ

問：今年なぜ台風が少なかったのですか？

(気象庁の一会員)

答：今年の夏の天候は平常の夏と比較してかなり特殊な年であった。6月上旬には一応つゆ入りらしい天候となったが、長続きせず亜熱帯高気圧の発達とともに梅雨前線は不明瞭となり全国的な空つゆとなった。この状態は7、8月と続き、昭和4年や大正13年に匹敵する大かんばつとなった。極東域における高気圧の発達については後にのべることにして、台風の発生やその経路も平常の年とかなり異なる様子を示した。ここでは主として天気図上に現われた現象をもとにして話を進めるとつぎのようになる。

(1) 台風の発生が異常に少ない。

平常では年間の台風発生数は28箇でその内わけは、1月より6月までに4箇、7月より10月までに20箇、その後の月に4箇である。

ところが今年は6月までの発生は零で気象庁の台風観測開始以来の記録となった。その後は7月に7箇発生したほかは、各月とも平常の発生数を下まわり、10月末までの発生は、18箇にとどまった、このように発生が少ない年には昭和20年、同26年、同29年、同44年などがあげられ、いづれも年間の発生数は20箇位で、今年はこれらの年に匹敵する寡少発生年となった。

(2) 台風進路の異常について

台風の発生数が今年少なかったことは前項で記した通りであるが、台風の進路も平常とはかなり異なっている。

平常であると発生台風のなかで、西進して華南や印度支那方面に向うものは、全体の40パーセント位である。しかし今年は10月末までの台風のなかで約70パーセントが西進の経路をとり、北上したものはわずかに5箇にすぎない。さらに日本に上陸した台風ではわずかに第6号があげられるのみであった。

上記のように台風の多くが西進のコースをとった原因としては最後に仮定的な思考として記してあるが亜熱帯高気圧の軸が平年に較べてかなり南偏したことがあげられる。

(3) 台風発生域の熱帯収束帯が弱い

太平洋高気圧よりの北東貿易風と、南半球より赤道を越えて北半球に流入する南東流との間には熱帯収束帯が形成される。今年の状態は、すでに記したように亜熱帯

高気圧の軸の南偏により、収束帯は赤道付近にあり平常よりかなり南に位置し(平常の夏は北緯10度付近)両気流の収束程度は弱まっていた。7月から9月までの3ヶ月の500ミリバル平均図のうえでも、高度偏差は大平洋中部からフィリピンにかけて大きな正偏差値がみられる。

以上天気図のうえから記述されるように台風の発生と亜熱帯高気圧の動静には密接な関係があるが、今年のように台風の寡発生と、その多くが西進コースをとった原因としては、亜熱帯高気圧の南偏→収束帯の赤道付近への南下→南半球よりの南東風の流入阻止→発生数の寡少と台風の西進が挙げられる。

(4) 要因の一つとして考えられるチベット高気圧の発生

夏季の西日本のかんばつとチベット高気圧の発達とは密接な関係があり、気圧配置の型でいわゆる鯨の尾型と呼ばれるものは、チベット高気圧の東に張出した部分が太平洋高気圧と結合した場合に出現するといわれている。

今年の場合、特にチベット高気圧の発達が著しく、その東の部分は小笠原高気圧と結合して広く本邦およびその南海上をおおった。

チベット高気圧の発達については未だよく分かっていないが片山と朝倉の調査によれば夏季この領域は強い熱源になっていることが分かっており、強い熱源を与えるほどチベット高気圧の発達は強まる。

シノプティックにはチベット高気圧が発達する場合には、極寒気が中近東方面に流出し、その東側で高気圧が発達する機会が多い、

Derek Winstanley は、1960年以降中近東方面への寒気の南下が顕著で、アフリカ北部に前線帯が発生し易くなっていることを指摘している。

以上今年の台風の寡発生と進路の異常について天気図の上で認められた現象を大雑把に記述した。しかしそれならばなぜ亜熱帯高気圧が南偏して存在したかについて明らかにしなければならない。その原因として考えられることの一つとして、気候の長期傾向として南北両半球の高緯度寒気の南下と北上により赤道付近での気温傾度が増し、そのためにおきるハードレー循環の強化により、平常の位置より北半球では南偏して亜熱帯高気圧が強化されたと仮定的な思考が行なわれる。

(長期予報 杉本 豊)